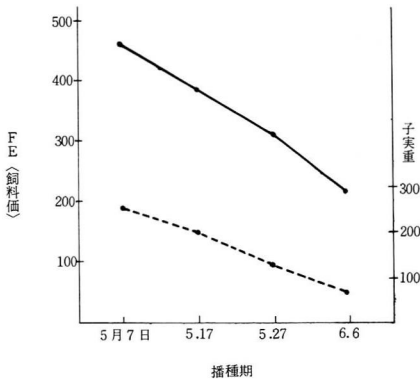


# 飼料用 F<sub>1</sub> とうもろこしはなるべく早播きしましょう

I) 播種時期が遅くなるに従い収穫時の栄養価（飼料価）は直線的に低下し、冷涼気象条件下では特に大きな差が生じます。

播種期が遅くても、見た目には大差がなく（草丈は徒長によってむしろ長い場合もあり）生総重も大きな収量差は認められない。

しかし、中身——飼料価、子実重——は極端に少なく、早播きほど高栄養生産に結びついていることがわかります。



## 冷害年の播種期と収量の関係

(十勝農試、昭和39~40年平均) 供試品種「複交8号」

II) 播種深度を2~3cmとやや厚目にした場合、晩霜が到来しても生長点は地中で守られ被害が小さく回復も可能です。

とうもろこしは霜に弱い作物なので極端な早播きはさげなければなりません。しかし早播きは子実の登熟度を高め栄養収量の向上に役立つので、軽い霜（晩霜）は恐れずに早播きすることが大切です。

尚、地上部が霜の被害を受けたとしても、生長点が守られていた場合は（その時点で播きおしたものと比較して）栄養収量では勝ることが報告されています。

	回復程度			被害のなかつた深さ
	大	中	小	
播種深度 (cm)	3.2	1.7	1.0	2.4

## 播種深度と晩霜害の回復程度

(十勝農試)

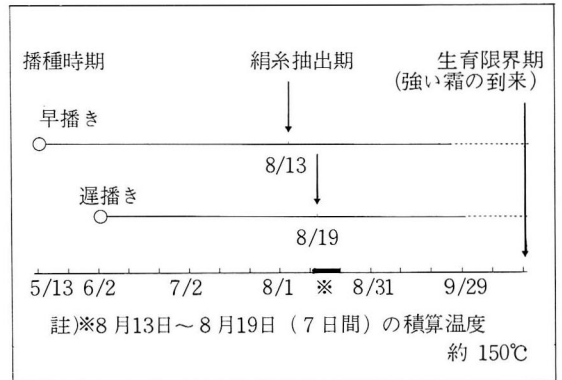
III) 早播きはなぜ栄養生産の向上につながるのでしょうか

サイレージ用とうもろこし栽培試験より播種期と収量に関する結果を抜粋 (北農試、昭和49年度成績書より)

供試品種	P 3715, W573, 交8号, 北交34号, W654, P 3431, JX202
播種期	5月13日, 5月23日, 6月2日
栽植密度	555本/a

## 結果

- 名品種とも播種期の遅れることにより絹糸抽出期の暦日は遅れた。(5月13日播種と6月2日播種との差異は各品種とも7日前後であった)
- 絹糸抽出期の早い場合、その後の登熟は好条件下にあるので、絹糸抽出後同一日数にて収穫されれば栄養収量増加に結びつく可能性が高い。
- 絹糸抽出期後同一日数で収穫された場合、各品種の栄養収量は播種期の遅れることにより減少傾向にあった。



IV) 《まとめ》早播きによって絹糸抽出期が早まり、定まった生育限界期に対して、子実の登熟に役立つ有効温度（有効日数）を拡大、延長することが可能となり、栄養生産の向上に結びつきます。特に晩生品種の栽培、不良気象条件下での栽培に当たっては早播きの必要性が強調されます。尚、早播きによってとうもろこしは通常、茎太く、草丈低く、頑丈に生育し、倒伏防止にもつながります。